

第2回 農林水産物・食品の輸出に係る物流検討会 議事概要

1 日時

平成26年2月25日（火） 15：00～17：00

2 場所

全日通霞ヶ関ビル8階会議室

3 議事概要

1. ニチレイロジグループ本社からコールドチェーンの海外展開事例の紹介があった。次に、事務局から第1回を踏まえた農林水産物・食品の輸出の課題と対応の検討についての説明があった。
2. 委員からは以下のような意見があった。
 - 月毎のデータなどを活用し、混載輸送や鮮度保持した輸出入等のためのマッチングを構築していくということは非常におもしろい発想だと思う。
 - 輸出可能な農林水産物・食品のデータを見えるようにするのは良いことだと思う。物流事業としては、輸送できる一定の荷量が確保されることが前提であるため、見えるようになれば効率的な物流が可能になるのではないか。
 - 農林水産物・食品の輸出の場合は、生産者から直接、農協経由等いくつかの形態があるが、市場からの混載輸出が一番多い。マッチングシステムは、このようないくつかの形態を想定したうえで構築してもらいたい。
 - エチレングスの影響の関係で混載できないのはリンゴ。その他の品目については、ある程度の期間内では、混載は特に問題ないが、コンテナ内のどこに配置するかはよく考える。
 - 輸出にあたり、貿易額だけではなく、量が把握できるとビジネ

スに向けたイメージがわきやすいが、貿易統計の一部に貿易量が掲載されている程度である。

- 春の野菜といっても地域毎に品目が変わるので、うまく組み合わせを考える仕組みが重要になってくる。
- 消費者のニーズを把握し、それを活用して物流側から荷主に提案するといったことも必要ではないか。そういう取組に対しては、個人情報保護にひっかからないレベルで情報共有してもいいと思う。
- 資材の情報も非常に重要な要素。詰め方を他の会社に見られたくない事業者もいるくらいで、そこには企業のノウハウが詰まっている。どうやってジャパンプロダクトをジャパルクオリティで出すか、を考える上でも考慮すべき要素になる。
- 国毎に規制はかなり異なり、輸出の際に影響が出るときもある。事例によっては政府間で交渉できる場合もあり、そのような規制等の情報が必要になるはずである。一方で特にアセアン等では情報が日々変わるなど頻繁な更新が必要で、対応が難しい。

以上

(文責 事務局)